

## マルコ10章13-52節 「先になる後の者」

### 1A 永遠の命に対する教え 13-31

1B 子供のように受け入れる者 13-16

2B 富よりも大切なもの 17-22

3B 神にはできる救い 23-27

4B この世でも受ける報い 28-31

### 2A 真に偉い者 32-45

1B エルサレムに行く目的 32-34

2B 備えられた位 35-40

3B 仕える者 41-45

### 3A 後の者 46-52

#### 本文

マルコによる福音書 10 章 13 節から見て行きます。私たちは午前礼拝で、イエス様が結婚の意義について語られたところを読みました。10 章は興味深い章で、様々な話題が出てきますが、実は一つの話から次の話題に移る時に、関連したことが出てきています。

### 1A 永遠の命に対する教え 13-31

#### 1B 子供のように受け入れる者 13-16

次に出て来る話は、子どもをイエス様が祝福することですが、それと結婚の話題は関連していますね。

13 さて、イエスに触れていただくこと、人々が子どもたちを連れて来た。ところが弟子たちは彼らを叱った。

イエス様のようにユダヤ教のラビに親が子供を祝福してもらおうとすることは、よくありました。けれども弟子たちが叱っています。そこには、当時のユダヤ人たちの子供への見方の影響があります。私たちは子供たちをかわいらしい存在として見ますが、彼らは子供を、神からの賜物としてみてはいましたが、13 歳に成人するまでの中間であり、何でもない存在のように見ていました。エルサレムの旧市街で、アラブ人の子供が大人にびんたされていた場面を見たことがありますが、子供は低く見られていました。

そして弟子たちが叱ったのは、そこに自分たちの仲間意識、エリート意識があったに違いありません。なぜなら、ヨハネが既に、イエス様の名によって悪霊を追い出していた人について、自分た

ちの仲間ではないからやめさせましょうか？と言っていたからです。イエス様は、そういった人々は自分の味方であると明言し、キリストに属するからといって水一杯を与えたら、報いからもれることはないと言われていました。ですから、ここではそういった信仰の小さき者を躓かせるならば、碾き臼を首に加えつけられて、海に投げ込まれた方がましだというイエス様の強い戒めがあったのです。けれども、ここで彼らは、イエス様は特別な人であり、つまらない人々からこの人を守るべきであり、子供なんて言語同断だと思っていたのだらうと思います。

14 イエスはそれを見て、憤って弟子たちに言われた。「子どもたちを、わたしのところに来させなさい。邪魔してはいけません。神の国はこのような者たちのものなのです。

イエス様が、ここで「憤って」と言われていますが、これには理由があります。先の弟子たちが「叱った」という言葉は、イエス様が汚れた霊に対して叱ったと言われた、その言葉と同じ言葉であるからです。つまり、悪霊に叱りつけるのと同じように、子供を叱りつけ、子供を神の国から追い出しているのとまったく同じことを行っていたからです。しかし、彼らこそが神の国に入るのに、ふさわしい者たちなのです。

15 まことに、あなたがたに言います。子どものように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに入ることはできません。」16 そしてイエスは子どもたちを抱き、彼らの上に手を置いて祝福された。

イエス様は、先に 9 章で、子供を彼らの真ん中に立たせて、「このような子どもたちの一人を、わたしの名のゆえに受け入れる人は、わたしを受け入れるのです。(37 節)」と言われました。しかし、イエス様はさらに話を進めて、自分自身が子供のようにならなければ神の国に入れないとまで言われました。そうです、弟子たちが子供たちを卑しめていましたが、彼ら自身が自分を卑しくしないといけないのだと、へりくだることを強く勧めたのです。そうです、自分を高める者は自分を低くしないといけません。そして、低くしている者たちは、子供が祝福を受けているように高められます。

そして、結婚についての神の定めをイエス様が語られましたが、もしそれを引き離したら、最も大きな被害を受けるのは誰でしょうか？そうです、子供です。男が女と結ばれ、一体になる時に、その一体の実子供です。その一体を引き離せば両者が傷つくのはもちろんのことですが、最も傷つくのは子供です。しかし、大人のわがままで子供が引き裂かれているということを見失ってしまいます。子供は、つまらない存在だからです。けれども、イエス様にとっては尊い存在なのです。

## 2B 富よりも大切なもの 17-22

17 イエスが道に出て行かれると、一人の人が駆け寄り、御前にひざまずいて尋ねた。「良い先生。永遠のいのちを受け継ぐためには、何をしたらよいのでしょうか。」18 イエスは彼に言われた。「な

ぜ、わたしを『良い』と言うのですか。良い方は神おひとりのほか、だれもいません。

非常に興味深いです、イエス様が子供を祝福している姿を見て、一人の人が近づいてきました。彼は金持ちで、他の福音書を見れば青年であり、また役人でもあります。彼は、「永遠のいのちを受け継ぐためには、何をしたらよいでしょうか。」と言っていますが、子供を祝福しているイエス様の姿を見て、そこに永遠のいのちを見出したのでしょうか。永遠のいのちとは、量以上に質であります。今の肉体の命を永遠に生きるというよりも、神のうちにある命のことを指しています。

彼は、イエス様を「良い先生。」と呼んでいます。ギリシア語に「良い」という意味のある言葉が二つあって、一つはカロスであり、それは外面的な善です。もう一つはアガソスであり、本質的な善であります。ここではアガソスが使われています。しかし、アガソス、本質的な善は神にしか持っていないものです。神は、天地を創造された時に、「よしと見られた」と言われましたが、善というのは神にしかないもので、彼が「尊い先生」と言ったら、それはその先生を神ご自身であるかのように話してしまっているのです。

それでイエス様が訂正されました。「なぜ、わたしを『良い』と言うのですか。良い方は神おひとりのほか、だれもいません。」ここでイエス様は、彼の意識を覚醒させようとしておられます。彼は、人間であるはずのラビに神の姿を見た、ということになるのです。単なる人であるならば、その使い方は間違っています。けれども、もしわたしが神であるならば、その通りです、ということを言われています。イエス様は、この人に対して、人間のレベルで永遠のいのちの道を見つけれないのだということに気づいてほしかったのだと思います。

19 戒めはあなたも知っているはずです。『殺してはならない。姦淫してはならない。盗んではならない。偽りの証言をしてはならない。だまし取ってはならない。あなたの父と母を敬え。』」20 その人はイエスに言った。「先生。私は少年のころから、それらすべてを守ってきました。」

イエス様は、十戒において後半部分を語られました。それは、人間関係を取り扱うものであります。そして彼は、その部分において、「私は少年のころから、それらすべてを守ってきました。」と、誠実に答えることができました。事実、彼は本当に真面目に生きてきたのだと思います。

21 イエスは彼を見つめ、いつくしんで言われた。「あなたに欠けていることが一つあります。帰って、あなたが持っている物をすべて売り払い、貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を持つこととなります。そのうえで、わたしに従って来なさい。」22 すると彼は、このことばに顔を曇らせ、悲しみながら立ち去った。多くの財産を持っていたからである。

この金持ちの青年に対して、イエス様は慈しみを抱いていました。ここでイエス様を取り上げた

のは、実は、「多くの財産を持っていた」つまり、第一の戒めです。「あなたには、わたし以外に、ほかの神があってはならない。(出 20:3)」まことの神以外に、富に頼っていました。「神」というのは、名前ではなく、「自分が寄り頼んでいる対象」そのものです。自分の有り方が、その対象に寄りかかっているのであれば、それを神と呼びます。ですから、彼にとっては富が神となっていたのであり、それゆえに第一の戒めに違反していたのです。

彼がもし、ここで悔い改めていたらどうでしょうか？彼が、自分を捨てて、神を神としていたらどうでしょうか？ここでは、彼が貧しい人に施しをしたら永遠の命を得るといふ、行いによる救いを教えているのではありません。いや、その反対です。彼が自分の行いによって救われようとしていたけれども、自分自身がまことの神を必要としている、まことの救いを必要としていることに気づき、それで神を神として受け入れていけば、御霊によって心が一新されます。新たにされた心は、全ての財産を投げ打って、主に仕えたいとまで願うはずで、貧しい人にも思い切って施すことができると思います。自分自身の世界、人間の世界で生きているから、十戒の後半部分、人間との関係においてきちんとできているように思われても、本質的な良い行いをできないでいたのです。そう、神ご自身の介入が必要であり、神の救いが必要なのです。そして、本質的な良い行いは、神の御霊によって初めて可能になるのです。

### 3B 神にはできる救い 23-27

23 イエスは、周囲を見回して、弟子たちに言われた。「富を持つ者が神の国に入るのは、なんと難しいことでしょう。」24 弟子たちはイエスのことばに驚いた。しかし、イエスは重ねて彼らに言われた。「子たちよ。神の国に入ることは、なんと難しいことでしょう。25 金持ちが神の国に入るよりは、らくだが針の穴を通るほうが易しいのです。」

イエス様は、弟子たちを敢えて驚かせました。富を持つ者は、神の祝福を受けているというのが、当時のユダヤ教の教えでした。アブラハムが多くの富を持っていたので、それで神の祝福を受けている徴にしていたのです。けれども、弟子たちはさらに、イエス様によってしっかりと教えられていなければいけません。富こそが、むしろ神の国に入るのに妨げになることが多いことを教えられました。新約聖書の教えには、富を愛することに対する警告が書かれています。「1テモ 6:9-10 金持ちになりたがる人たちは、誘惑と罠と、また人を滅びと破滅に沈める、愚かで有害な多くの欲望に陥ります。金銭を愛することが、あらゆる悪の根だからです。ある人たちは金銭を追い求めたために、信仰から迷い出て、多くの苦痛で自分を刺し貫きました。」

26 弟子たちは、ますます驚いて互いに言った。「それでは、だれが救われることができるでしょう。」27 イエスは彼らをじっと見て言われた。「それは人にはできないことです。しかし、神は違います。神にはどんなことでもできるのです。」

イエス様は、神の救いを彼らに明確に教えられました。神の救いとは、人には決してできないことなのだということを、「針の穴を通るらくだよりも難しい」という表現にされました。当時、中東地域で最も大きな動物がらくだでした。彼らが目にする最も大きな動物です。それと、身近な最も小さいものとしての針の穴を取り上げられました。救いは、それだけ、いやそれ以上に難しいということなのです。ですから、私たちはキリストから離れては、何もすることができないということを初めに知る必要があります。そして、神には何でもできるということを次に受け入れます。ですから、イエスが死者の中からよみがえったということを感じて、それで救われるということパウロはローマ 10 章で説いているのです。

#### 4B この世でも受ける報い 28-31

28 ペテロがイエスにこう言い出した。「ご覧ください。私たちはすべてを捨てて、あなたに従って来ました。」29 イエスは言われた。「まことに、あなたがたに言います。わたしのために、また福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子ども、畑を捨てた者は、30 今この世で、迫害とともに、家、兄弟、姉妹、母、子ども、畑を百倍受け、来たるべき世で永遠のいのちを受けます。

富が妨げになることをイエス様が語られたので、ペテロは確かに自分たちは全てを捨てて、あなたに付いてきています、と語っています。そこには自信もあったでしょうが、自分たちこそが初めに報いを受けるべきだという思いもありました。イエス様は、報いを受けること自体を否定されていません。それが 29-30 節に書かれていることです。

とても興味深いのは、今のこの世においても報いを百倍受けると言われていることです。しかも、「迫害とともに」そうなのだということです。これは何を意味しておられるのでしょうか？ 迫害によって、失われる者があります。ユダヤ人であれば、いや異邦人でもそうですが、家族から迫害を受ける人、また勤当される人さえいます。しかし、主は百倍の家族を与えられました。そうです、世界の国々にいる神の家族であります。どこに行っても、主は霊の家族を置いてくださっています。それが肉の家族以上に、深い結びつきがあるのです。さらに、「畑を百倍受け」とあります。これは、霊的な財産です。物理的な畑を福音のゆえに失ってしまうかもしれません。けれども、霊的な財産はしっかりと受け入れています。

私たちは、失っているようで富んでいる者たちです。今、日本には家庭崩壊の問題があります。また共同体が崩壊していつている問題があります。けれども、私たちは気づけば、福音によって一つの共同体があります。毎週、特に他に得することもなく、ただ主にあつて集まっているのです。そして、大事ですが、ここで具体的に仕え合い、愛し合うのです。ここを単に、教えを聞く場だと思わないでください！ 単なる講演会であれば、そこには互いの責任関係がありません。けれども、私たちは、どんな嵐においても転覆しない、ノアの箱舟のような舟に乗っているのです。

そしてもちろん、後の世における永遠のいのちという報いを受けます。私たちは現在においても、霊的祝福があり、そして将来に対する希望も持っているということです。

31 しかし、先にいる多くの者が後になり、後にいる多くの者が先になります。」

イエス様は、ペテロの上昇志向を少し戒めました。マタイによる福音書は、ここで五時から雇われた男たちの譬えをされたことを記しています。マルコはここでは敢えて、その譬えは語らず、話の最後に出て来る、乞食バルテマイの話で、「後にいる多くの者が先にな」ることを教えています。

## **2A 真に偉い者 32-45**

### **1B エルサレムに行く目的 32-34**

32 さて、一行はエルサレムに上る途上にあつた。イエスは弟子たちの先に立って行かれた。弟子たちは驚き、ついて行く人たちは恐れを覚えた。すると、イエスは再び十二人をそばに呼んで、ご自分に起ころうとしていることを話し始められた。33 「ご覧なさい。わたしたちはエルサレムに上って行きます。そして、人の子は、祭司長たちや律法学者たちに引き渡されます。彼らは人の子を死刑に定め、異邦人に引き渡します。34 異邦人は人の子を嘲り、唾をかけ、むちで打ち、殺します。しかし、人の子は三日後によみがえります。」

イエス様がエルサレムに向っています。その間、主は弟子たちの先に立って歩かれています。そこには一つの使命に対する決意が表れていました。そうです、ご自身が苦しみを受け、死なれ、そして三日目に甦るという使命であります。弟子たちも、また付いてきている人たちも驚いています。が、それはまだ、イエス様の言われている使命を悟らず、理解できずにいるからです。

### **2B 備えられた位 35-40**

35 ゼベダイの息子たち、ヤコブとヨハネが、イエスのところに来て言った。「先生。私たちが願うことをかなえていただきたいのです。」36 イエスは彼らに言われた。「何をしてほしいのですか。」37 彼らは言った。「あなたが栄光をお受けになるとき、一人があなたの右に、もう一人が左に座るようにしてください。」

覚えていますか、ヤコブとヨハネは、ペテロと共に、イエス様と高い山に上った二人です。ペテロが自分たちは何もかも捨てて、付いて来ましたと言って、自分たちに対する報いを期待していて、そこでヤコブとヨハネが、自分たちも右大臣、左大臣の地位によって報いを得たいと願っているのです。

38 しかし、イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、自分が何を求めているのか分かっていません。わたしが飲む杯を飲み、わたしが受けるバプテスマを受けることができますか。」39 彼らは

「できます」と言った。そこで、イエスは言われた。「確かにあなたがたは、わたしが飲む杯を飲み、わたしが受けるバプテスマを受けることになります。

ここに、とんでもない意志疎通のずれが起こっていますね。イエス様が語られているのは、「あなたがたが栄光の座に着くというのなら、その前に苦しみを経なければいけないけれども、それでよいのか？」ということでもあります。イエス様が苦しみを経て、それによって神がご自身を引き上げてくださり、右の座に着かせてくださいます。それを自分たちができるのか？ということ問われています。ここでの杯は、苦しみ一杯であり、同じくバプテスマとは苦しみ一杯のバプテスマです。ところが、彼らは他のことを考えていたことでしょう。そこでイエス様は、彼らは確かに苦しみを受けることを同意されました。ヤコブは、後にヘロデ・アグリッパ一世によって殺され、殉教します。ヨハネは殉教はしませんでした、パトモス島に流刑にされました。

40 しかし、わたしの右と左に座することは、わたしが許すことではありません。それは備えられた人たちに与えられるのです。」

ここにイエス様のへりくだりがあり、また私たちが知るべき、神の主権と任命があります。右の座、左の座ということは、備えられた人たちに与えられるということです。神がどこにだれを置くかということを決めておられるのです。ですから、私たちがとやかく言えるようなことではないのです。しばしば、御霊の賜物について、あたかもそれを選ぶことができるかのように語られることがあります。賜物は、御霊のみこころにしたがって与えられるものであることを、パウロはコリント第一 12 章で語っています。

### 3B 仕える者 41-45

41 ほかの十人はこれを聞いて、ヤコブとヨハネに腹を立て始めた。

ヤコブとヨハネがやったことに、他の十人は腹を立てました。ということは、彼ら自身もやはり、自分が偉くなりたいという思いがあったからこそ、こういったいさかいが起こったのです。

42 そこで、イエスは彼らと呼ばせて言われた。「あなたがたも知っているとおりに、異邦人の支配者と認められている者たちは、人々に対して横柄にふるまい、偉い人たちは人々の上に権力をふるっています。43 しかし、あなたがたの間では、そうであってはなりません。あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、皆に仕える者になりなさい。44 あなたがたの間で先頭に立ちたいと思う者は、皆のしもべになりなさい。45 人の子も、仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのです。」

イエス様の大事な教え、またマルコの福音書の主題と言っても良いでしょう。それは、「イエス様

は、仕えられるためではなく、仕えるために来られた。」ということです。それゆえに、自分たちも仕える者であって、皆のしもべになることを求めなさいということでもあります。私たちは、DNA のように自分が仕えられることを求めてしまいます。人に仕えてもらって当たり前のところがあります。それが明らかに出てくるのは、ヨハネ 13 章でイエス様が足洗をされるところです。弟子たちは、だれも互いに足を洗いませんでしたが、イエス様が率先して弟子たちの足を洗われました。それはしもべの役だったのですが、率先して行われました。

神を知らない人々、異邦人であれば、横柄にふるまっています。旧約聖書においては、ファラオがいますが、彼は神としてあがめられていました。新約時代のギリシアやローマも、専制政治を行っていました。世がそのようなものですから、私たちは互いに集まっていたら、自然にそういった方向に動いてしまいます。けれども、神の国ではそうではありません。私たちが倣うべき方はイエス様であり、イエス様が手本を示され、この方について行くのです。仕える者、奉仕者としての心得は、一にも二にも、イエス様に仕えることです。

そして、イエス様はご自身が仕えるのは、「多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与える」というところまでに至ることを教えておられます。ここでの贖いの代価というのが、「身代金」のような意味合いがあります。つまり、私たちが悪魔に人質にされているような感じです。イエス様はご自身の命を身代金にして、私たちが罪から解放されたということです。イエス様は、そこに至るまでご自身を父なる神に従わせたのです。「ピリ 2:6-8 キリストは、神の御姿であられるのに、神としてのあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を空しくして、しもべの姿をとり、人間と同じようになられました。人としての姿をもって現れ、自らを低くして、死にまで、それも十字架の死にまで従われました。」

### **3A 後の者 46-52**

9 章を含めて、イエス様が仕える道を教えて来られました。自分を捨てて、十字架を背負う道を教えられました。けれども弟子たちがまだ、目が開かれていません。イエス様がエルサレムに向かう道は、もうエリコに来ておられます。エリコからエルサレムまでは、都上りのための上り坂になっており、歩いて一日の道のりです。今、この時期には過越の祭りを祝うために、他のユダヤ人も数多く歩いていたことでしょう。そこで起こった出来事が、まさにこれまでイエス様がお語りになっていたことを手本のように見せている人物です。バルティマイであります。

46 さて、一行はエリコに着いた。そしてイエスが、弟子たちや多くの群衆と一緒にエリコを出て行かれると、ティマイの子のバルティマイという目の見えない物乞いが、道端に座っていた。

当時、盲人や障害者の人たちは、普通に働くことはできませんでした。生き延びる道は物乞いをするのみです。ですから新約聖書にも、物乞いをしている足なえの人などが出て来ることに



気づきだったと思います。そしてモーセの律法によって、彼らを省みなければいけないことは命じられているので、守られていました。けれども、見下されてきました。こうやってみると、10章は、初めは離婚状を一方的に出される女たち、そして離婚によって最も犠牲を受ける子供たちと、小さき者たちが取り上げられていました。イエス様がそういった人たちに関心を持っておられたのです。しかし、マルコはしっかりと彼の名をここで書き記しています。おそらく、彼は当時の諸教会で、名が知られていたのかもしれませんが、つまり、立派な弟子になります。

47 彼は、ナザレのイエスがおられると聞いて、「ダビデの子のイエス様、私をあわれんでください」と叫び始めた。48 多くの人たちが彼を黙らせようとたしなめたが、「ダビデの子よ、私をあわれんでください」と、ますます叫んだ。

バルティマイは、明確にこの方がメシアであることを信じていました。「ダビデの子のイエス様」と叫んでいます。これはメシアに対する呼び名であり、イエスがキリストであることを告白しているようなものです。そして、先ほど子供を弟子たちが遮りましたが、ここでも人々はバルティマイが叫ぶのを黙らせようとしていました。けれども彼の優れているところは、ますます叫んでいることです。人々からの圧迫など、彼はものともしなかったのです。

49 イエスは立ち止まって、「あの人を呼んで来なさい」と言われた。そこで、彼らはその目の見えない人を呼んで、「心配しないでよい。さあ、立ちなさい。あなたを呼んでおられる」と言った。50 その人は上着を脱ぎ捨て、躍り上がってイエスのところに来た。

イエス様は、このような信仰を持っている小さき者に心を留めておられます。人々は、たしなめまです。真実な信仰者は、弱いところから出てきます。だから、常識的な考えの人たちから見下されるのです。しかし、それもものともせず、イエス様のところに向ったのです。ここで、「上着を脱ぎ捨て」とあります。これは、彼にとっての全てです。寝床であったらうし、物乞いをする時の袋であったでしょうし、寒さをしのぐシェルター替わりにもなっていたかもしれません。それを脱ぎ捨てたのですから、彼のイエス様に従う決意は固かったのです。躍り上がって、というところに彼は喜んで、脱ぎ捨てたことがわかります。

51 イエスは彼に言われた。「わたしに何をしてほしいのですか。」すると、その目の見えない人は言った。「先生、目が見えるようにしてください。」52 そこでイエスは言われた。「さあ、行きなさい。あなたの信仰があなたを救いました。」すると、すぐに彼は見えるようになり、道を進むイエスについて行った。

ここでの「先生」は、「ラボニ」であり、我が主と言っているぐらいの呼び名です。そして、イエス様は、「わたしに何をしてほしいのですか。」と言われましたが、「目が見えるようにしてください。」と

答えました。ヨハネとヤコブも先に、イエス様に同じ問いかけをされて、右大臣、左大臣を頼んだのです。しかしバルティマイは、目が見えることが先決でした。これが、靈的にも手本になっていることでしょう。弟子たちが、靈的な目が見えるようになることです。そしてイエス様は、「あなたの信仰があなたを救いました。」と言われました。バルティマイは、イエス様を信じていて、信仰を積極的に働かせたのです。神の力が、信仰という管によって現れるのです。これも、弟子たちが信じて、靈的な目が見えるようにならないといけません。

そして、「すると、すぐに彼は見えるようになり、道を進むイエスについて行った。」とあります、そうですね彼はこの時から弟子の道を歩みました。けれども、一週間ぐらい後にイエス様は十字架に付けられるのです。ですから、先の者でイエス様から離れた弟子たちも多かったのですが、彼は後の者なのです。後の者が先になり、先の者が後になることが多い、ということを物語っています。バルティマイが、ここまでイエス様が弟子たちに教えられていたことを、そのまま実践している手本だったのです。